

些細なことを「大きな不安がある」と表現する。一人だけ考えているのに「集落みんな失敗すると考えている」という。こうした場合「石橋は叩いて壊すものじゃありません。やってみて失敗したら、次は成功するようにやり方を変えればいいじゃないですか」とだけ答え、それ以上の無駄な論議は避けた。

3 行動理念と取組み対策

私たち公務員に足りないもの、それは一言で言うと「実践する能力」である。机上での企画立案はいくらでもする。大抵の場合、お金(税金)と時間をたっぷりかけた「印刷物」が大量に作られ、それで事業が終わってしまう。

かつて、一年間かけて委託費を含め500万円の印刷物を誇らしげに自慢する役人の話を聞いて、怒るといふより開いた口が塞がらなかったことがある。「理念」と「実践」が欠落してしまっている。彼には明確な理念がなかった。こうした住民や集落にとって全く役立っていないケースが多い。役に立つから「役人なのだ」といっていた先輩の言葉が蘇ってくる。

社会を構成する最小単位、それは「家庭」である。「家庭」は「人」から成り立っている。それが拡大したのが集落であり、集まり町を形成し、それが集まり市となり、県となり、国となっている。私たちの羽咋市を一軒の「家」そして「人」として捉え、当てはめてみた。血液は「税金」である。必要な場所に必要分量しか私たちの身体は血液を流さない。一箇所に溜まるとうっ血する。循環器系の要である。心が動き行動となる。体の一箇所でも怪我をすれば、直そうと手で押さえる。指先が怪我をしても、切断しようとする人はまずいない。組織になるとどうだろうか。のこぎりを出してきて、この左足が邪魔だ、お前がいるから右足が目立たないと言って、切っている人を見たことがない。つまり、人が集まり組織化すると「害虫駆除的な発想」をする人間が出てきてしまう。本来は、「家庭」と喩えたのだから家族であってしかるべきである。そこに住む人々が仮に自分の家族であったらど

うだろうか。家族が玄関で苦しんでいれば、助けるのに印刷した理由書はあるだろうか。疲弊した農村集落は印刷物では変化しない。当たり前の事であるが、相変わらず「印刷物」を作ろうとする。この行為は無駄だとは言わないが、それに基づいて「実践」しない限り無意味になってしまう。割愛して言うと「理念」とそれに基づく実行するシステム力である。動かすために何が必要で、何処を動かせば、最も効果的であり、効率的かという咄嗟の判断あるいはセンスといってもいいかも知れない。地域を一人の「人」に喩えると、見えないところが見えてくる。一番重篤な疾患の場所が判ったり、些細な怪我から重症部分まで、何から最初にしなければならないのか、そのプライオリティーが判ってくる。振り返れば、命題を与えられた一年はあっという間に過ぎ去っていた。「一日せめて36時間欲しい」という部下の言葉が脳裏から離れない。

4 成 果

(上昇した農家所得)

一年間のプロジェクトで神子原地区の農家所得は平均2.8倍となった。昨年まで一俵12,500円だったコシヒカリが一俵42,000円でさばけた。5kg入り3,500円(税込み)で売ったのである。日本酒を作るときに出た酒粕は「客人のおすそわけ」と命名され、石川県内の酒屋の店頭に並んでから15分で全て消えた。17年4月の集落説明会で「顧客が一人もいないし、農協以外で一体誰が買ってくれるんだ!」と怒鳴った農家が何人もいた。



酒粕：「客人のおすそわけ」